



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	月刊DRF 第2号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合; Digital Repository Federation
Description	事務局: 北海道大学附属図書館 http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
Issue Date	2010-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73487
Type	journal
File Information	DRFmonthly_2.pdf, in Japanese





月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第2号

No. 2 March, 2010

【特集1】COAR総会

【特集2】地域WS等レポート

その他の記事

おしえてDr.F～マドリードの地下鉄図書館

DRF参加機関紹介～GINMU: 奈良県立医科大学機関リポジトリ



第1回COAR総会

平成22年3月2日・スペイン国立通信教育大学

(写真最前列中央はCOAR代表のノルベルト・ロッソウ氏、その左が財務担当理事アリシア・ロベス・メディナ氏です。それぞれ一昨年のゲーティンズチュートシンポジウム、昨年のDRFIC2009で来日し講演しました。上部中央には水色のシャツを着たクリフォード・リンチ氏の姿がみえます)

COARって何だっけ？

COAR (オープンアクセスリポジトリ連合) は、昨年10月に生まれた、DRFの国際版と言えるような連携組織です。現在、オープンアクセスを推進する、世界の48の組織によって構成されています。日本からは、DRFのほかに、NII、MyOpenArchiveが参加しています。

平成22年3月2日に開催された第1回総会では当面の活動方針が話し合われました。事務局から示された多くの活動テーマ候補について10名のプレゼンターが論点を語り、会場全体で討議する形。CNIのクリフォード・リンチ氏(下写真)からは、「ニュートラルであることを最優先に」、カナダ図書館協会のキャスリン・シーラー氏からは、「サクセスストーリーを共有していくことが大事」等の意見があり、最終的に次の5項目が当面の活動課題として設定されました。



1. 普及啓蒙
2. 情報共有(好事例の蓄積と共有、...)
3. 相互運用性(資源識別子、統計、...)
4. 人材養成(リポジトリ管理者研修、...)
5. 世界のメタデータ収集

COARへの参加の意義って？

あの人に
聞きたい！

国際的なつながりは
わたしたちに何を
もたらすのでしょうか？
国際連携WG主査の
内島氏に聞きました。



ボルチモアで開催されたSPARC Digital Repository Meeting 2008でゲッチンゲン大学図書館長のロッソー博士が代表だったDRIVER (COARの前身) とMoU (相互理解メモ) を交換して以後、DRFの国際連携が急速に現実味を帯びてきました。これまで「遠い世界」と思っていた欧米のリポジトリニシャブが、いきなり自分たちと同じ世界になった感があります。

欧米の大学図書館界は我が国と制度的な成り立ちが異なり、同じ土台の上で議論をするのは困難な面もあります。また、プロジェクトの進め方についても、とくにヨーロッパは独自の優れた文化、歴史と制度を持っています。

COARへの参加は、欧米から吸収し学ぶだけでなく、こうした彼岸の差を踏まえながらも、こちらから情報発信してリポジトリ運動を言語の壁を超えて進めていくための「パス(道)」が開かれたことを意味します。これはこれまでの我が国の大学図書館界にはなかったことです。DRFに参加された皆さんが、この「パス」を利用して、日本のリポジトリの達成や図書館員の力量を、積極的に海外に示していくことが期待されています。主役は「あなた」です。



Why would it be necessary?

- **Vision:** rich public and economical **service layer** based on OAR-share in Open Information Commons
 - examples: global indexing, search, statistics, mash-ups, alerting, recommender, re-use, mining, enrichment ...
- **OAR vision challenged** by distributed nature
 - requires each service provider overcome heterogeneity, laboriously identify entities, aggregate metadata
- COAR Global Metadata **Store** could be a **cure**
 - reference object registry of OA-objects free for everybody to use (or at least non-commercial use)
- **Benefits / Success Factors:** increased visibility and re-use of local repository content > traffic, inlinks etc., Open Inf. Commons > # of service providers

世界のリポジトリのメタデータを集積し再利用可能とすることの必要性を論じるウォルフラム・ホルストマン氏(ビーレフェルト大学)のスライドから



総会(左写真)は、あたかも、HARPやゆうキャンパスリポジトリのような地域イニシアチブが先に在って、それらが集まって、DRFを作ろう、で、みんなでこれから何をしたいのか、と話し合っているようなイメージでした。

全体プログラム

2/17

- * 13:00-13:10 開会
- * 13:30-14:30 講演(小山憲司)
- * 14:45-15:45 講演(佐藤翔)
- * 16:00-16:20 講演(高田良宏)
- * 16:20-17:30 ディスカッション

2/18

- * 9:30-11:30 事例報告1~9
- * 11:30-11:50 質疑応答
- * 11:50-12:00 閉会

講演:

「学術コミュニケーショ
ン」の
現在」
小山憲司
(三重大学)



研究者の情報入手に関する行動を分析。学術環境の変化に伴い、研究者の行動も変化している。「図書館の役割も変化していくはず。」

「リポジトリ
分析による
学術情報流
通の諸側面」
佐藤翔
(筑波大学)



今回の参加大学を中心としたダウンロード数の調査。「リポジトリは作っただけではコンテンツは来ない、コンテンツがあるだけでは利用者は来ない！」

「研究室に埋蔵
されている
研究・教育資料
公開の試み」
高田良宏
(金沢大学)



学術情報は文献だけではない。研究データ等は研究室に蓄積されており、電子になり便利になったようで、使えない可能性が高い状態。共有のためには、

ディスカッション:大学図書館の役割についての意見交換

杉田茂樹(北海道大学):サービスと保存は分離の時代。紙媒体出版時代と同じ仕事をしてはダメなのでは? 図書館機能は、書き手と読み手をつなぐ、人と人をつなぐことではないか。

高田先生(金沢大学):図書館が、広い分野にまたがるつなぎ手となるのではないかな。

内島秀樹(金沢大学):機関リポジトリはその役割を果たせるか。



事例報告:



1.「HUSCAP? HUSCAP! : 4年目を迎えたリポジトリ」

紙谷五月(北海道大学)

IRをきっかけとして、学内に派生的なヒト関係も

3.「アーカイブズとしての機関リポジトリ」

土屋直之(山形大学)

IRの集成ではなく地域リポジトリとしての共同リポジトリ

2.「機関リポジトリは図書館活動のなかに」

鈴木雅子(小樽商科大学)

OAは図書館全体マター。Springerトンネル、SCOAP3、BRII...「IRをIR担当者だけに任せておいてはいけない」

4.「新潟大学学術リポジトリ(Nuar)と新潟県地域共同リポジトリ(NiRR)」

高橋昌子(新潟大学)

「機関リポジトリを説明する際、図書館の存在意義と司書の必要性も併せて説明します。学内の認知度、評価が向上します。」

5.「教員の協力率調査:どれだけ論文をもらえたのか/著者同定:同じ著者を名寄せする」

守本瞬(金沢大学)

文献公開勧誘メールの結果集計。着手可能文献約65%(うちGreen約85%、SuperGreen約15%)。着手後の先生からのレスポンス約20%

8.「大学図書館の地域・広域連携と情報発信:リポジトリとデジタル・アーカイブ」

加本純夫(島根大学)

SWANは純SAを目指している。論文誌情報は外部データからの利用が可能。デジタルアーカイブは単館にとどまらず地域の拠点として。研究と研究対象ソースとの紐付け組織化

6.「JAIST学術研究成果リポジトリ事例報告」

寺田美樹(北陸先端科学技術大学院大学)

H20から業績DBベースでアウト制度、教育研究評議会承認、掲載教員25%→70%

7.「二つの機関リポジトリ」

水上満雄(福井大学)

福井IRを福井共同リポジトリにマージ(メタデータのみ。フルテキストは福井IRへのリンク。)

9.「九州大学学術情報リポジトリ」

吉松直美(九州大学)

持続可能な機関リポジトリのための人材進化構造講習会開催。演習に次ぐ演習。毎回、円陣!



2月19日 長崎国際大学機関リポジトリ研修会



九州では稀な雪の日となった2月19日、すぐ横にハウステンボスの街なみがみえる長崎県佐世保市ハウステンボス町、長崎国際大学にて機関リポジトリ研修会「リポジトリの全体像」が開催されました。

DRFから講師として千葉大学、武内八重子氏がリポジトリ初心者である大半の参加者に分かりやすくリポジトリの紹介を行った後、九州大学から伊東栄典准教授、吉松直美氏、長崎県立大学佐世保校から久保沙織氏、長崎国際大学から飯島芳典氏がそれぞれの事例や取組の紹介を行いました。

久保氏は長崎国際大学の卒業生で凱旋発表ともなり、10月に開始したリポジトリの紹介では「資金は少なく・成果は大きく」をモットーに勉強・勉強の日々であったと力強く発表されました。また、30名以上集まった教員から、リポジトリ・著作権への率直な疑問や学術情報のこれからといった事まで様々な質問が飛び交い、闊達な研修会となりました。

「教員評価と機関リポジトリ」
 篠森敬三(高知工科大学)


機関リポジトリには、成果物を公開することによって、他の教員・職員・学生にも業績が明らかに becoming という間接的な教員評価の機能がある。これを教員側が受け入れれば機関リポジトリと教員評価の間で相互作用が働き、機関リポジトリが積極的に推進されていくのではないかと。

「機関リポジトリ概論」
 土出郁子(大阪大学)


シリアルズ・クライシスによる研究活動への影響から、オープンアクセスの考え方とその一端を担う機関リポジトリの役割・機関リポジトリの基礎知識と構築・運用の手順を講義。「構築・運用のハードルは下がっています。後は、必要性を見極めてやるかどうかを決定するだけ。」

「共同リポジトリ概論」
 尾崎文代(広島大学)


一つのサーバに複数機関の教育研究成果等を蓄積・保存する共同リポジトリについて解説。国内外の共同リポジトリの紹介、ShaReの活動、共同構築の意義と今後の展開について。「共同リポジトリとは、中小規模機関のリポジトリ構築を助長し活性化させるコミュニティ。」

全体プログラム

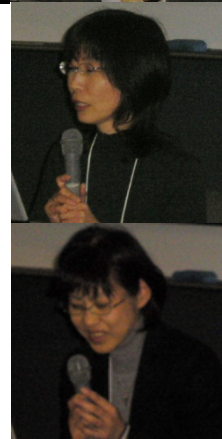
- * 13:00-
教員評価と機関リポジトリ
(篠森敬三)
- * 13:30-
機関リポジトリ概論(土出郁子)
- * 14:00-
共同リポジトリ概論(尾崎文代)
- * 14:40-
機関リポジトリ事例報告
(徳島大学・鳴門教育大学
愛媛大学・香川大学・高知大学)
- * 15:50-
システムの安価な構築方法
(前田信治)
- * 16:10- 質疑応答

**四国地区で初めての
DRFワークショップ開催！**

四国地区機関リポジトリ事例報告

「徳島大学の場合」折原善彦
 「鳴門大リポジトリ現況報告」山本豪
 「XoonNipsでのリポジトリ構築(愛媛大学)」
 仙波行茂
 「香川大学の場合」岩澤尚子
 「高知大学学術情報リポジトリ構築の歩み」
 小吉百合

これから構築にとりかかる大学から構築済みの大学まで、それぞれの現状報告を行った。構築に至るまでの難しさや試行錯誤、失敗例も具体的に語られた。「地方中小規模の大学からでも教育研究成果の発信ができます。それぞれの大学のそれぞれの機関リポジトリでいいのです。まずは第1歩を踏みだそう！」


「システムの安価な構築方法」
 前田信治(大阪大学)

自力構築・低スペックサーバの勧めについて。学内に眠っている古いPCなどを使って自分でシステムを構築し、リポジトリをきっかけに、新しいことに挑戦してみませんか。


3月2日 Reform報告会 編集部特派員参加報告
全体プログラム

- *13:00~13:40 「REFORMが提言する2020年の大学図書館像」
- *13:40~15:00 講演:デーヴィッド・シュレンバーガー(アメリカ公立大学協会副会長):
「The Future of Libraries and Scholarly Communications」
- *15:10~16:40 討議

「REFORMが提言する2020年の大学図書館像」土屋俊

情報提供主体として希少性の管理から豊かさの管理へ。(これまでは「いかに買うか」、だったのが「いかに多くの中から適切に提供できるか」へ)


「The Future of Libraries and Scholarly Communications」デーヴィッド・シュレンバーガー

1. 図書館ではデジタル資料がもっと増える。この流れは止まらない。図書館はデジタル資料の適切な提供に力を注ぐようになり、物理的な資料の保存はコンテンツのためではなく、単に物理的な保存の役割のみとなっていくだろう。また、その環境の中で大学は彼ら自身による学術成果物のデジタル化にますます価値を見出していくだろう。
2. 現在多くの大学で研究成果の登録を義務化している。これは研究者や大学自身の判断である。ここからわかるように大学は研究成果の可視性を高めることは大学にメリットをもたらすと思っている。
3. 今後大学は研究成果の可視性をもっと求めるようになり、それを実現するために図書館を使いたいと思うだろう。よって図書館はこれらのアクセスを提供し、大学の研究成果の可視性を高めるのにどれだけ貢献しているかでも評価されていくだろう。今後図書館は大学の評判を左右する存在になり得るし、またそれには大学の可視性をどれだけ高められるかにかかっている。
4. **だから、図書館の未来は明るい！**

特派員りほこ
です



マドリッドの地下鉄図書館

COAR総会は、スペインのマドリッドで開催されたそうじゃな。マドリッド市の地下鉄駅構内にはミニ図書館 ("Bibliometro")があるぞ。忘れ物文庫のようなものではなく、写真のように立派な施設。通勤通学の途中にいつでも立ち寄ることのできる、ナイスなアイデアじゃな。

おしえて
Dr.F

マドリッド市地下鉄のうち18の駅にあるんじゃ。曲線的なデザインで、曲面になっている左の壁の中央にある小さな黒い部分が出納口。



中はこんなふう。スペインに行く機会があったら、ぜひ覗いてみるといいぞ。



GINMU:

奈良県立医科大学機関リポジトリ



DRF
参加機関
紹介



GINMUトップページ
<http://ginmu.naramed-u.ac.jp/>



担当の鈴木孝明さんと和田崇さん

Q1. 担当課担当係と運営体制をおしえてください。

学務課医学情報係(=附属図書館)です。図書委員会の下部組織としてIR専門部会を設け、各分野の先生方に参加していただき企画・運営にあたっていますが、実質、係長が総括と対外的な活動を行い、ILL担当者1名がコンテンツの収集及び登録作業を兼務しています。

Q2. 導入システムは何ですか？

DSpace1.3.2日本語版です。当館ではシステムを開発できるスキルがなく、システムの保守・管理は業者に委託しています。ただし、サイト内のロゴマークやレイアウトなどのデザインは当館で行っています。

Q3. 公開時の苦労話や秘蔵話、他機関と違った活動などをぜひ。

2008年8月に試験公開、2009年11月より正式公開となりました。当館では、思いがけずシステム導入予算が先に付きましたので、まず空箱は立ち上がりましたが、コンテンツ収集に必要な設置要綱等の整備が遅れ、さらに旧式のスキャナにより電子化作業の効率もサダメでしたので、試験公開から正式公開までのタイムラグが大きくなった次第です。現在は高性能(?)裁断機及び高速スキャナーの導入で作業効率は高くなりました。また、現図書館長の発案により本学の学生が行った臨床Problem-based learning(問題にもとづく学習:PBL)の成果をまとめた症例報告集などの登録も始め、研究者だけでなく、将来の医学界を担う学生を対象にしたコンテンツも登録しています。

Q4. GINMUのチャームポイントは？(ここが気に入ってるといったところを)

ずばり、GINMU(ジンム)の愛称とロゴマークです。「ジンム」という愛称は、本学所在地に所縁のある神武天皇にあやかっていますが、図書館で運営するシステムに付けたい！という係長の20年来的夢がかなったものです。ロゴの方も係長の「ガダム的なもの」という希望で、ILL担当者が幾度かの試行錯誤を繰り返し現在に至りました。(試験公開時と正式公開時とはかなり違ってあります。(※当館ブログ「ないとブログ」内で確認できます。))今後はさらに、あの「せ〇とくん」を凌駕するマスコットキャラクターができればと思っています。

Q5. DRFに期待することは何ですか？

DRFさんには、全くの手探り状態であったGINMUの導入当初から、様々な情報を知る上で大変お世話になっています。(現在進行形です。))また、様々なイベントを通じて多くの方々とのお会いがあり、元気力をチャージできることも大きな魅力の一つです。参加機関がどんどん増えて、リポジトリ活動が学術情報流通の大きな流れとなることを願っています。

次号
予告

【特集1】機関リポジトリ担当になったら

IR担当者のお仕事解剖。新担当者だけでなくすべての図書館員に役立つ情報が満載

【特集2】海外出張報告 武内さんのフランス・ドイツ出張報告

編集後記：人事異動で体制が変わる機関も多いようです。IRに新たな魅力を付加できる好機。お互いがんばりましょう♪兵庫教育大図書館広報誌の巻頭マンガをご覧になりましたか？秀逸！（鈴）

応募
企画

Dr. FのF募集！

Dr.FのFって何？
DRF教授の名前と性格を募集します
説明、お名前、ご所属を明記の上、
gekkandrf@gmail.com までお寄せください



月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com

月刊DRF第2号 平成22年3月31日発行 デジタルリポジトリ連合